

ISHIKAWAみらいアート展トークイベント
「障害者アートのこれから—美大生の視点から—」

10月28日（土）13時～16時 於：金沢美術工芸大学3号館101講義室

【タイムテーブル】

13：00	ごあいさつ／趣旨説明	渋谷 拓（金沢美術工芸大学教授）
13：05 ～13：50	基調講演「障害者アート～埼玉県とみぬま福祉会工房集の取り組みから」 宮本恵美氏（みぬま福祉会（埼玉県）、アートセンター集センター長）	
14：00 ～14：50	ラウンドテーブル「障害者アートのこれから—美大生の視点から」 【登壇者】キュレーション担当学生3名、宮本恵美氏、渋谷拓	
15：00 ～15：30	「『障害者アート』について今思うこと」	渋谷 拓
15：30 ～16：00	情報交換会（自由な質疑応答）	

ラウンドテーブル「障害者アートのこれから—美大生の視点から」*

令和5年10月28日（土）14時～15時
於：金沢美術工芸大学3号館101講義室

登壇者

小林 葵（本展キュレーション／金沢美術工芸大学芸術学専攻3年）
高橋紀子（本展キュレーション／金沢美術工芸大学日本画専攻3年）
宮岸桂花（本展キュレーション／金沢美術工芸大学芸術学専攻3年）
宮本恵美（基調講演者／みぬま福祉会 アート工房集センター長）
渋谷 拓（司会／学生指導・本展キュレーション／金沢美術工芸大学教授）

運営

光井はるな（本展グラフィック・デザイン／金沢美術工芸大学芸術学専攻3年）
寺井剛敏（学生指導／金沢美術工芸大学教授）

渋谷 | ラウンドテーブル「障害者アートのこれから—美大生の視点から」と題しまして、ISHIKAWA みらいアート展のギャラリーAのキュレーションを担当してくれた3名の学生と宮本さんと渋谷で、ざっくばらんなおしゃべりのような感じにしていきたいと思っています。よろしくお願ひします。まず、学生の方から自己紹介させていただきたいと思ひます。

* 本テキストはトークの内容を簡易整文したものです。

宮岸 | 金沢美術工芸大学芸術学専攻 3年の宮岸桂花です。よろしくお願いします。

高橋 | 金沢美術工芸大学日本画専攻 3年の高橋紀子です。よろしくお願いします。

小林 | 金沢美術工芸大学芸術学専攻 3年の小林葵です。よろしくお願いします。

渋谷 | はい、ありがとうございます。先程は宮本さんは「全然アートがわからない」という中でお仕事をされてきた、って言うっておられたのですけれど、後で私も自分のことをお話ししますけれども、私も必ずしも専門ではない。それで今日、前に並んでくださっている担当した学生も必ずしもこの分野の専門家ではない、この分野を必ずしも研究しているわけではないっていうことなんですけれど、私の趣旨としては、そういった専門家が増えていくこともさることながら、この分野に少しでも携わったことがあるっていう人や学生が少しでも多くなっていくってことが大事かなと思っていて、それが私がここで教鞭を取って伝えていきたい、広げていきたいってことでもひとつにはあります。だからはっきり言ってしまえば、みんな専門家ではない、でもその視点こそ大事かなと思っているところもあるので、そういった感じでお話を聞いてくだされば、と思っています。

3人にお尋ねしたいんですけども、先程の宮本さんの講演をまずお聞きして、ご自身の気づきとか学びとかあったら少しお話ししてほしいんですけど、どうでしょう？

小林 | じゃあマイクを持っているので、私から失礼します。貴重なお話ありがとうございました。私は美術大学で美術教育を受けている人間で、福祉に関しては全くその現場すら知らないという状況にあります。お話を聞いていて、特に印象的だったのが金子慎也さんの作品です。手で（粘土を）握って、それを彫刻のような見せ方をしたという作品で、それが、リハビリを兼ねているということとかは、現場にいないと決してわからないことで、そういう現場、施設とかで働いてらっしゃるスタッフの方々の色々な試行錯誤があって、作品が生まれ、それを評価する学芸員がいて、それを魅せる学芸員がどういうふうにやっていくかっていう仕事に住み分けがあり、グラデーションがありながらも、皆、作家の表現に対してどういうふうに見せたいかとか、試行錯誤しているっていう点ではすごく一緒だっているのを強くこの作品で実感しました。

あとは、横山明子さんのお話で、「好きなことをして仕事になるのか」というお話と、「仕事は苦勞しなきゃいけないから」というお話がすごく心に刺さって。絵が仕事になるのかっていうのは、もちろん一般的にあるお話だとは思いますが、好きなことをすると言っても、必ず苦勞がないわけではないというか、好きなことを探求するというのは、仕事としてやりたくないことを事務的にやることよりももっと辛い、別の苦勞があると私は思っているので、そういうことがすごく、お話を伺って色々刺激になりました。

高橋 | 高橋です。まず、このみらいアート展のキュレーションチームとして携わらないかというお話を受けた時に、元々私自身が美術大学という進路を選ぶ前に、教育分野の特別支援学校の教員になりたいと思っている時期がありまして、障害と、自分の学んでいるアートの関わり合いについて現場で学べる機会があるのならということ今回お話を受けさせてもらいました。

あの、あまり関係ないんですが、私の母は行政としてその福祉の方に少しだけですが携わっている期間があり、今も障害者手帳の交付という形で行政の仕事をしておりまして、福祉と行政と、あとアートという形で障害者の方々について、どうやって携わっているの

かなというところにもすごい興味がありましたので、今回宮本さんのお話を聞いてとてもありがたいと思っております。先ほどお話の中で、そのぼろっと「アートって何が起こるかわからない」ということを聞いた時に、なんかすごくハッとしまして。自分自身も、言葉とか態度で伝えるよりも、アートを通して、作品を通してでしか相手に伝えられないことがあるな、っていうことをとても日々感じていますので、こう、アートを通して人と人との繋がりが目に見える形で現れるという行動について、とても関心がありました。

宮岸 | 宮岸です。私は埼玉県出身なので、埼玉のこういう福祉事業に関して、ここまで詳しくお話を聞いた機会は初めてだったので、高校時代にこうした福祉に関する授業が多かったなという印象があったので、埼玉県がこのように頑張っていることが知れて、とっても自分にとっては有意義でした。

あと、私の中で残っていることとして、やっぱりグッズ化をたくさんされているなという印象がありまして、歌手の方とコラボして、コンサートのグッズになっていたり、洋服の BEAMS とコラボしていたり、いろんな企業の方とコラボをしていたりとか、グッズにする時の形も多岐に渡っていて、働くということを軸にこういう活動をされていると思うので、やっぱり社会との繋がりがっていうのが、こういうグッズ化であったりとか、より多くの人の手が届きやすい形に姿を変えていっているっていうところが、私にとってすごく興味深かったですし、面白いなと思ってお話聞かせていただきました。はい、以上です。

渋谷 | はい。感想ありがとうございます。どうでしょう、宮本さん。今の学生のリアクションに対しては？

宮本 | はい、ありがとうございます。すごく嬉しいです。私も原稿を考えてきたんですけど、その中でちょっと原稿にないことが、ぼろっとこぼれちゃったりとか、さっきの「アートで何が起こるかわかんない」みたいな。ぼろっと言っちゃったことが意外と響くんだなと、今なるほどと思ったんです。本当にそうですね、私も多分、福祉の仕事で表現をするという、私のそれまでの人生じゃとても考えられないことが今起きていて、多分それまでの人生だったら、こんなふうには美術大学でお話することはなかったでしょうし、学芸員の方と知り合うとか、もうすごいアーティストさんと繋がるとか、きっとあり得なかったと思うんですけど、本当にこの仕事について福祉って意外といろんなところと繋がる業種なんだなとすごく実感しています。なんか福祉ってすごく狭くて守られている場所で、その中でお金も安いし介護も大変だしっていう世間的なイメージはとても悪いかと思うんですけど、でもその中でも、やっぱりいろんな人と人との関わりの中で、クリエイティブなことってたくさん起こっていて、すごく想像したり、いろんなこと考えたりして、いろんな人と関わっていることでいろんなことが生まれて、っていうのをその世界だけでやっていただけじゃもったいないなと思って。で、それをアートを通して私たちは伝えられる手段があるので、本当にアートが人と人を繋いでくれる、すごくいいツールなんだなって、すごく今実感しています。

渋谷 | はい、ありがとうございます。私も宮本さんの話を聞いていて、色々お尋ねしたいところもあるんですけど。

まあここは今回のみらいアート展を通じて、私から見て左手にいる 3 人の学生が何を感じて何に気づきどんな苦労したか、何が面白かったか、ということをお話する場だと思っ

ているので、私からの質問は後に残しとして、ちょっと3人に今回の事業全体に関わっているのざっくりとした感想というか、そういうのがあったらひと言ずつお話いただけませんか。

宮岸 | まず私からマイクを持っているので話させていただきます。私自身、元々障害者アートとかアウトサイダーアートにとっても興味があったというわけではなくて。元々集合体が苦手で、アウトサイダーアウトとか障害者アートって、やっぱりドットであったりとか、1つの画面にいろいろなものが集合している作品が多いので、苦手としている分野ではありました。ですが、この展示空間をこう構成する、企画するキュレーションにとっても関心があったので今回参加させていただいて。自分が担当する作家さんのところにインタビューに行かせていただいたり、その作家の作品を選ばせていただいたり、そういう経験をして、やはり作品数が多い作家さんの作品の中でどれを選ぶのかっていうのが、私自身とても難しく。会場の一番入口すぐのところにあった作品なんですけれども、この高橋雅さんの作品はとても作品数が多くて。スケッチブックが何冊も、10冊以上のスケッチブックにびっしり作品が描かれていたり、とにかく作品数が多い中で、その多くの作品を見てどれを選ぶのかっていうのを考えた時に、展覧会として決められた空間で、どれぐらいの作品をどう見せるのかっていうのを考えるのがすごく難しかったです。でも今回この高橋さんの作品は、割と精神世界を描いているものが多いので、多様ないろんな感情をテーマに展示できないかなと思ってこれらの作品を選んでいきました。やっぱり展示をキュレーターとして作品を選ぶときに何を基準にだったりとか、何を見せたくてっていうのをすごく考えるのが自分にとって学びになりましたし、今後大学で学んでいく上でも大きなプラスになったかなと感じました。

渋谷 | はい。各作家さんについては、また後で触れるかなと思います。じゃあ次、高橋さん。

高橋 | はい。まず障害を持つ作家さんのキュレーションをするということで、障害という、「あなた障害があるんでしょ」っていうことを、一般人に伝えたりすることって、ちょっと身構えてしまうこととかがあるので、どういう形で私が、例えばいらない発言をしたりだとか、そういうことをしないようにちょっと身構えた部分はあったんですが、あんまり障害の有無というのは関係なく、ひとりの作家さんとキュレーション側ということで携わっていけばいいんだなっていうことをすごく実感しました。私が今まで見てきた障害者アートは障害というものが前面に来て、作品を展示するっていうことが主だったんですが、私自身が美術学生ということで、作り手のひとりとして美術やアートを学んでいるからこそ、作品、作り手に寄り添っていくことの方が重要なのではないかなという気づきがありました。それで今の美術を評価する中で、コンセプトだとか、使っている画材、モチーフ、あとはどういう歴史の文脈を持っているのかという作品を成り立たせている情報の方に目が向いているのではないかなって感じているところがありまして。だから作品自体よりも情報の方が、あるいはその生み出している作家の持つ情報の方が重視されている状況について、よし悪しというのは人の基準があるので各々の考えている部分があると思うんですが、私としてはひとりの作り手として、やっぱり作品の持つ力に触れてほしいなって思う部分がありますので、今回キュレーションに参加したことで、作家の生み出す作品を見てもらえるように、作家解説の執筆だとか作品展示を考えていきました。作家さんたちは、キュレーションする側が基本展示の内容を考えたりだとか、展示する作品を選んだりしたんですが、やっぱり自分の作品の魅力を伝えるために、できる限り奮闘していた

だいたなということ、ひとりの作家としてもキュレーション側としてもとても実感することができました。自分でお話したりだとか言葉を伝えることがかなり困難な作家さんも多かった中で、周りにいる支援者の方やご家族の方が、とても親身にできる限り自分の家族や周りの人たちの活動について、とても奮闘されていたなっていうのも実感できました。

あとは少しそれるんですが、絵画や彫刻といった枠を超えて作品として認めてもらえるというこの現代のアートの状況が、とても障害者アートと相性がいいのではないかなと、今日宮本さんの講義を聞いてとても感じました。障害を持っているか、あるいは健常であろうとどういう作家であろうと、作品を作って見てもらうことが作家として一番のコミュニケーションなのではないかと思っていますので、キュレーションする側の私が作家さんと社会を繋げていくために最もすべきことは、準備を重ねて作品のやり取りをしていく中で、社会とコミュニケーションを取って、言葉ではなくアートを通して、作品を通して繋がっていくことの方が一番重要なのではないかと気づきました。以上です。

渋谷 | はい、ありがとうございます。高橋さんのことについて言うと、僕は作り手として参加してござってとても嬉しくて。僕も文学部とかで美術史やってきたクチだし、隣にいるおふたり、宮岸さんも小林さんも芸術学専攻ということで。まあ今の芸術学専攻は作る部分もあるんですけど、日本画を専攻されている高橋さんが来てくださったことで、作り手としての立場、美大生としての立場っていうのがより出てきたかなというか、とても良かったと思っています。ありがとうございます。じゃあ小林さんお願いします。

小林 | 私がこの展覧会に関わりたいなと思った大きな動機が、私の親族に福祉の分野に関わっている方がいて、何度かお話を聞いたことがあって。でも自分は何もできないっていう、モヤモヤみたいな、そういうフラストレーションがあったのがきっかけです。障害があるかどうかって何が決めるんだ、何なんだ、っていうのをずっと疑問に思っていました。障害があるかどうかって、社会が決めていることであって、その枠組みに当てはめることだとか、その境界っていうのは、本人とか周りの人たちって、あまり本当は気にしたくないとか、気にしない方がいいんじゃないとか、そういう色々な疑問がある中で、自分が完全に共感することっていうのは難しく、ならばせめて理解を深めたいっていう思いで、参加させていただきました。

実際に色々携わっていく中で、すごく自分の視野とか固定観念が結構崩されたというか、そういう経験が色々あって。例えば、展示台の上に物が置かれていると、なんでも作品に見えるなとか思って。ここにあるペットボトルのお茶が展示台の上にあると急に作品っぽくなるじゃないですか。絵とかも額縁に入っていると作品っぽく見えるなっていうので、それって結構、何が作品かどうかとか、何が健康で何が障害と見なされるかどうかみたいなことと結構マッチしているんじゃないかとか考えることがありました。詳しくはこの後、ひとりひとり担当した作家さんや作品の話でしたいなと思います。

渋谷 | はい、ありがとうございます。じゃあ、これから少し作品を見ながら、どういうふうに考えたかってすると少し話しやすいかなと思うので、そういうふうにしていきたいなと思います。キュレーションの会議の中で、作家さんの解説を書く上で我々にとって課題になったのは、障害者アートの分野ってことでそれを解説に盛り込んでいくのかどうかってことでしたよね。でもあんまり統一したことをしないでやろうっていうことになったと思うんですね。確か。それで、それが各自の解説をどうやっていくかっていうことと関

わってきたと思うので、短くですけど、どんなことを気にして書いたのか、展示したの
かってことを少し写真に従って見ていきましょうか。写真は高橋雅さんですけど。

宮岸 | 高橋雅さんの担当者は私なんですけれど、私、美術館にあるように綺麗に整頓され
ている状態に並べるよりも、壁を利用して作品を散らすような感じで、規則正しくという
よりも、散らした展示にしたいなと思ってこういうふうな配置を考えました。高橋さんの
特徴として使っている素材、描画材。クレヨンで書いていたり、ペンで書いていたり、絵
の具で書いていたりっていうのが、すごくいろんな表現のバランスがある作家さんで。た
くさんの画材で表現しているっていうことと、精神世界をテーマに描いている作家さんな
ので、いろんな喜怒哀楽を楽しめるようになっていうのを考えて、この作品たちを選んで、
こういう配置で考えてみました。

渋谷 | はい、じゃあ次の高峯梨紗さんは…

高橋 | はい、高橋が担当しました。そもそも昨年のみらいアート展のプレ展の方でも高峯
さんは出展されていて、授業の一環で私もそのプレ展を見に行ったんですが、その時にこ
の一番左の動物の作品も去年も展示してありまして、この作品見た時にすごく感動しまし
て。そもそも私が専攻している日本画の中では、命を描くことをすごく重視しています。
例えば1年次の時は、生きているものをとにかく描写するという作品制作を1年間課せら
れまして、例えば、植物だったりとか生きているウサギを1ヶ月間飼育して、その生きて
いる姿を見ながら、1枚の作品として仕上げるということを課題にやってきた中で、2年
次の時にこの作品を拝見したんですが、こう、骨格とか細かい形を見ると、確かにこのサ
イだったりとか上のワシかな？だったりだとかは、多分少しずつずれているところがある
んですが、でもそういうところじゃなく、眼差しだとか毛並みだとかにすごく関心を注ぐ
ように描写されていて、なんだかこう、正しい形を描くことじゃなくて、命そのものを描
くことっていう難しさを私自身すごく感じていたので、すごく眼差しを優しく持ちながら
命に迫る作品を作られているんだというのをその時感じていました。

今回高峯さんを担当するというので、高峯さんは金沢にある金沢アート工房さんに所
属されている作家さんで、保管場所に行って作品を何点か選ばせていただいたんですが、
とにかく全ての作品の中で生き物が登場していて、生き物に対する視線がとて真摯だ
ということをアート工房さんのほうからうかがって。じゃあ生きているもの、私が選んだ基
準としては、左から動物と、真ん中が動物と人間で、一番右端が人間を描かれていること
ということで、姿かたちは違うんですが、どれも命を共通して描かれているということを前
面に出したくて、この作品を展示しました。

渋谷 | はい、ありがとうございます。じゃあ加藤たけひろさんは担当が小林さんです。

小林 | 加藤さんの作品は、今スクリーンに映し出されているのは実は作品の一部を拡大し
たものでして、本当は、1枚でもっと大きい作品なんです。まだ会場でご覧になってな
い方、ぜひ見ていただきたいんですけど。私がなぜこういうふうに拡大したのかってい
うと、加藤さんはアナログで描いたちっちゃい絵をスキャンしてパソコンに取り込んでか
ら、色とか大きさとか変えて、組み合わせて、重ねていってこの作品を完成されているん
ですね。

なので私は、その成果物としてデジタルのデータのことを、1枚の紙に印刷してみせるというよりは、加藤さんが実際に手を動かしながら、どこに重ねるかとかを、どのように考えて作っていったのかと、パソコンの画面と対峙して、そこで何が起き、どういう感覚で作っていたのかを、現実に近い状況で見せたかったっていうのがあって、紙に印刷せず、モニターで映すということをしました。

あとは細かく重ねているところとかって、紙に印刷しちゃったら近づいて見ることしかできないと思うんですけど、モニターだったら拡大して見られるということで拡大したショットをいくつか、スライドショーで繋げて、ぐるぐる画面上を拡大して廻って見られるようにしました。

渋谷 | はい、ありがとうございます。僕もこの分野で何回か仕事をしている中で、最近本当にデジタルデバイスを使って制作されている人も多く、けれどもそれを印刷して提示するっていうよりはそのまま見せてあげるっていう、ディスプレイとかですね、そういったあり方って結構障害者アートっていうものの理解の幅を広げる上でも大事なかなと思っていて、そういったトライをしてくれた小林さんには、ありがとうございますと言いたいなと思っています。もちろん作家さんと話してね、こういった形でいきたいっていうことを合意しながら進めたってことがあります。ちょっと写真の順番で行くことにしますか。

小林 | はい、船橋さんも私が担当しました。船橋さんのこれまで展示されてきた作品は全て、針金のパーツを発泡スチロールとかに刺して展示されてきました。そして、針金を曲げた形が主に3種類ありまして、船橋さんがいらっしゃる施設から預かった時点では、3種類全部ごちゃ混ぜでした。船橋さんが針金を曲げて作っていたのを、いつも身につけているポーチに入れていくそうなんです。それをガサッと出して、施設の方が金沢アート工房に持って行く。アート工房の方が3種類に分けて刺して、作品というか、形にしていたそうなんですけれど、私はワイヤーを曲げてポーチに入れるっていうプロセス、それが面白いと思ったので、透明のウエストポーチを購入して、中身が見えるようにして、そこから曲げたワイヤーが溢れ出ているような感じで展示させていただきました。船橋さんはみらいアート展と同時期に開催されている21世紀美術館での展覧会にも出展されていて、それは発泡スチロールに刺した作品なので…。まあ学生が好きにやっていたら、今までやったことないことをやらせてほしいなと思って、こういうふうになりました。

渋谷 | はい、ありがとうございます。所属されている施設とか、もしくは周りのご支援者の方々が作品として見せていこうっていう時に、まあいろんなやり方があるって、どれが正解っていうことでもないんだけど、なんだろう、取り組みが違えば見せ方も違ってくるっていうことがそれはとても大事なかな。金沢アート工房さんが展示されていたやり方とはまたガラッと変えて、発想を変えてくれたところがひとつの成果であるかなと思っています。ただこれ、こういった展示ってすごくセンスいるんですよ。だから大変ご苦労されたと思います。大変試行錯誤されていましたね。これは大崎良一さんですね。

高橋 | 担当は高橋です。最初県庁の方から、この今回出展される15名の作家さんの作品ですという資料をもらった際に、大崎さんの資料には真ん中の作品のような絵画作品は含まれていなかったんですよ、全て書道作品で。私自身も、じゃあ書道の作品の展示ってどうやってやっていけばいいんだろうっていうことを考えながら、大崎さんが所属している施設のほうに渋谷先生と一緒に向かってお話を聞いたんですが、そうしたら「いや、書

道作品以外にもあるんです」っていうお話を聞いて「えっ」て言ったら、「いや、実は絵画も描いてまして」ということを施設のかたと大崎さん自身から伺いまして。ならぜひ見せていただきたいということで、そちらの方もたくさん点数があったんですが、大崎さんの話を聞く上で、実は書よりも絵画の作品のほうが描くの楽しくて好きなんだ、っていう言葉をもらって、だったら当初の書道とプラスで絵画作品もぜひ飾らせていただきたいということで、展示数を増やしまして当初の書道の作品と交えながら、絵画の作品を展示しようという流れになりました。大崎さん自身がすごく特殊な描き方というか、体の可動域がすごく少なく、確か右足の親指に金具を設置して、それに鉛筆だとか書道の筆を設置して書かれるという制作方法を取られていまして、書道の方は多分一発書きでないところのような感じで書けないと思うんですが、特に鉛筆画を見ていただいたらわかると思うんですが、すごい筆跡が行き来しながら描かれているんですよ、作品が。大崎さんが「絵画を描くの楽しいな」っていうことを考えながら、ずっと筆を画面の紙の上で行き来させている跡がとてよく見えていて、なんだかこう、なんて言うんですか、輪郭があまり綺麗とは言えない作品なんですけど、この行き来する鉛筆の動きこそが、大崎さんの絵を描きたいっていう意思の表れだなと思ひまして、展示させていただきました。

渋谷 | はい。大崎さんに関しては今お話が出ましたけれど、足で書（描）いているってことを解説で出していくのかどうか、ってことは悩みどころでしたね。

高橋 | そうですね。こう、障害ということを前面に出しながら展示するということを考えていなかったんですが、やっぱり先入観で手で書（描）いているんだろうなっていう思いの中、お会いしたら「実は足で書（描）いているんだ」っていうことを言われて、障害を前面に出していきたくないわけではないんですが、そういうもうひとつのユーモアとして、個性として展示できないかどうか、ということを考えながら今回選ばせていただきました。

渋谷 | はい、ありがとうございます。次も高橋さんですね。松元伸乃介さん。

高橋 | 松元さんは、特に市内に限らず国内で作品の展示だったりとか、あるいは新聞社の方と一緒に協力して作品発表されているような、活動歴がすごく長い作家さんなんですけど、資料でまた県庁さんの方からいただいたものを見た時に、どうしてこんなに動物たちの、生き物のまなざしが優しいんだろうっていうことにすごく感動を受けまして。絵画制作をしている身からすると、余白ってすごく嫌われるというか、とにかく白い画面をあんまり残さないで余白のところに背景だったりだとか、色を乗せた方がいいよ、って言われてきてたんですよ。私自身の中で、とにかく生き物の在り方だとか、優しさだとかを前面に出されている松元さんの作品のこの素晴らしさに触れて、とにかく展示数を増やしたい、というわけではなかったんですが、描かれている対象のこの眼差しの優しさをどうやったら皆さんに伝えられるのかどうかということを考えながら、今回 9 点選ばせていただきました。

渋谷 | はい、ありがとうございます。坂下奈美さんは宮岸さんの担当ですね。

宮岸 | はい、坂下さんは宮岸が担当しました。坂下さんの作品の魅力として私がとても感じるのが、こう、動物たちの目がとても生き生きしていることなんですね。

私、最初見た時は切り絵だってわからなくて、最初は資料でいただいただけだったので、切り絵だってわからないぐらい繊細すぎて、その緻密さであつたりとか、上の原稿用紙のようになっている作品も泉鏡花の『夜行巡査』っていう小説の一部分を切り絵にしてみたという形で、切り絵という形で成立させるために、原稿用紙のような枠をこう用いて、文字と文字がバラバラにならないように工夫されて作られている作品で、実際に作家の方のお家でインタビューさせていただいた時も、目の前で鳥の羽を瞬時に切り絵で作ってくださったんですけど、本当に繊細な作業を黙々と進められている姿が印象的でした。坂下さんの作品は切り絵というのもあって影が面白い。影が面白く出る作品が、このミミズクの作品であつたり、猫の作品、とんぼの作品とは面白く出ていたので、そういう浮き出ているように見える作品と絵画のように平面的な作品を互いにバランスよく配置できるように、っていうのを考えて展示しました。

渋谷 | はい。ご担当された高橋雅さんとも違って、サイズもバラバラだしね。形も様々だから散らして展示するって美術館学芸員にしてみたら結構ハードル高いんですけど、うまくやってくれたと思って見ていました。はい、ありがとうございます。輪島さんのご兄妹のうちのお兄さんの方ですね。

小林 | はい、輪島貫太さんの作品です。輪島貫太さんは、妹さんの楓さんと、2人で結構テレビとか新聞とかに色々取り上げられているような作家さんで、ある種、作家イメージみたいな、この人といえばこういう作品だよ、ってイメージが固定されているような気がして、どうせなら新しい可能性を提示したいな、っていうので、今まで展示してこなかったようなものに目を向けてみました。貫太さんは集合絵で知られていて、今までは集合絵がいくつか額装されて、バンバンと並べられる展覧会が多かったんですけど、「作品はどういうふうに描いているんですか」と聞かれることが結構多いみたいで、それならそのプロセスを見せよう、っていうので、みらいアート展のギャラリーAではこういう集合絵の制作風景、作業画面を展示しました。この作品はiPadで描かれていて、デジタルで描いている風景が、どのように描き進めているのか、全部録画することができて、その録画したものを早送りしてモニターで再生しました。その下が、完成品を印刷したものです。今まで、こういう動画って作品として見せてこなかったものだと思うんですけど、それをあえてみせる、そして下が作品としてよくみせられている状態、額縁に入っているものを提示するっていう、そういう対比を意識したり。

それから右側はA4のコピー用紙に描かれたもので、これも額とかつけずに、さらっと貼ったんですけど、これは集合絵ではなくて、「トリビアの泉」っていう番組があると思うんですが、その本を読んで、貫太さんがその場面を想像して描いたもので、よく見るとその場面の切り替えとか面白くて。この作品は結構昔の作品であまり展示してこなかったみたいで、こういう背景があつて集合絵を今描いている、ということ意識して展示しました。

渋谷 | はい、ありがとうございます。時間的にちょっとオーバーするんですけど、このまま行きたいと思います。ぜひご了承ください。じゃあお隣の楓さんですけど。続けてどうぞ。

小林 | はい。妹さんの楓さんは、すでに切り絵の作品で知られているんですけど、切り絵の作品は結構前の作品で、今は切り絵というよりは、物語を紙芝居みたいに描いていく

制作に移行されています。毎日描いていって、気づくと、部屋の外に置いてあるプラスチックのかごに A4 コピー用紙が大量に積み上がっていて、それをお母様が回収するっていうのがあって...ご自宅に伺ったんですけど、もう管理しきれないくらいコピー用紙がもう何万枚も重なっていて。この量ってすごくて、この一面を魅せたいなと思って、もうそのまま用紙を積んで展示しました。

でもこれはただの紙ではなく作品で、中に物語があるので、iPad に取り込んで、ご来場の方々がこうページを送ってみられるようにしました。よく読んでみると、その中に出てくる登場人物って、昔作っていた切り絵のキャラクターと一緒にだったりするんですね。それがわかるように、iPad の上に切り絵の作品を、物語から飛び出した登場人物かのような感じで展示しました。切り絵の余りの紙とかもすごい量があるので、楓さんの作家性、日々の制作が感じられるなと思って展示しました。

渋谷 | 輪島楓さんは、しいのき迎賓館の 2 階の展示にもあったようにコラボで製品になっていることも多い作家さんですけど、ご自身だけではなくて、お母様が結構頑張っていて、楓さんも寛太さんの場合も、いろんな形でプロデュースされているんですけども、輪島さんのご兄妹の作品を今回小林さんが展示するにあたって、お母様とも色々やり取りしながら、新しい引き出しを作ろうとなさった、ってことですかね。

小林 | はい、そうです。21 世紀美術館でやっている展覧会でも切り絵が今展示されているようです。いつもと違うことしてみただなあって思ってもらえたら、それでいいかなと思って、ちょっとこういうことをしてみました。

渋谷 | はい。輪島さんに限らず、美大の学生がこうしたらより面白いんじゃないか、こういった見方もあるんじゃないか、っていう提示する仕方は、作家さんもしくはご家族のご支援者にとっても新しい視点というか見方というか見せ方というか、それらを獲得できて次に繋がるっていうことなのかなと思っています。はい、細川陽平さん。

高橋 | はい、担当は高橋です。まず、ちょっと現実的な問題で、ギャラリーA の中で作家さん 15 人の作品を展示するということが決まり、ということは分割していくと 1 人あたり 2、3 メートルしか多分壁面が使えないということで、細川さんがそもそも大型の作品、絵画作品を作られるかたで、じゃあたとえ多くても 2 点までかなと思いつながら、細川さんが市内にギャラリーをご家族の方が経営しておりまして、そこに訪問して作品を選ばせていただいたんですが、とにかく作風がとても変わりやすいというか、すごく変化がある作家さんで、例えば風景画だったりだとか、植物の絵だったりだとか、あるいは今回展示したようなスポーツをしている選手の絵だったり、ご家族の顔写真とかを使った絵だったり、動物の絵だったり。とても幅広い制作方法で描かれている方だったんです。特に今回多くの作品を見させていただく中で、このスポーツマンの作品を飾りたいということで、作品をお貸しいただきました。特に見てもらいたいなと思ったのが、この主役であるバスケットボール選手のアレン・アイバーソンという選手よりもこの後ろで見ている観客たちの顔をよく見ていただきたいなと思って、今回 1 点だけの展示にさせていただきました。一見すると、目とか鼻とか、あと眉、口の描き方が一定なんじゃないか、スタンプのようにちょっと押されているだけなんじゃないかと思いきや、よくよく見ると、全然眉の形だったりとか、あとは口の開き方、手の表情だったりとかが全然違うなということ、実際にギャラリーに訪問させていただいてとてもわかったので、これをぜひ来場される方

に見てもらいたい、と。このスポーツの会場にいる人たちの表情にまでこだわって細川さんが描かれているということを通して、人を描くということに対する細川さんの制作の意義や合図を感じていただきたいなと思ひまして、今回1点の展示となりました。

渋谷 | はい、ありがとうございます。今回キュレーションをするにあたって、もう可能な限り作家さんに来て作品を実見して選ぶということをほぼ徹底してやっていたんですけども、細川さんのところは作品も多くて大きいし、圧巻でしたね。

高橋 | 本当に大型の2、3メートル以上の作品ばかりで、しかもお父様が確か額を木工のほうに興味か何かで作って額付でギャラリーの中で展示するという。一般の方が見られるその奥にもさらに作品があって、「これほどこの会期でどここの所に貸すんだ」ということをお母さんのほうから伺うぐらいに、本当に積極的にご家族の中で細川さんのアートを発表するっていう活動をとても応援されていることを感じました。

渋谷 | これは私が担当させていただいた川崎裕長さんですけども、川崎さんは右利きだったけれど右半身が麻痺してしまって、左手で描かれている方です。それで、この美大の卒業生でもいらっしゃるんですよね。作品を見せるにあたって、ご友人と作った画集があってそれをベースとして考えました。ご友人が俳句を書いて、それに対して川崎さんがリアクションとして絵を描く。だから画集の原画をこういった形で展示されているんですけど、実に味わい深いというか、とても面白いなと思って見ておりました。実際にお会いしてお話ししてっていう中で画集とその原画という展示にしてみた次第です。

渋谷 | 次に西花さん、西花天翔さんも私が担当なんですけれど、一貫して左下が入り口、右上が出口の迷路を書くのが西花さんなんですけれど、なんていうか、もうフリーハンドでそのまま描いていくっていうのがとてもすごくて。ある日突然描き始められて、それを皆さん、周りの方々がとても驚かれて、頑張れ頑張れって感じで今たくさん絵を描いていらっしゃるんですけど、特に僕がいいなと思ったのは、やっぱり下の大きい作品ですね。自分で飼っていた文鳥と過ごした時間をね、春夏秋冬っていう形で4つのエリアに描き分けて、その真ん中を、四季のなかを飛び抜けるようにあの文鳥がいる。各季節を回らないとちゃんとゴールできないって、私、迷路をやりましたけれど、すごかったなと思って。だから、来てくださっている皆さんにも少しでも迷路をやってもらいたくて下の方に展示したっていう次第です。まだ会場行ってない方は、ぜひ行って見てほしいなと思っています。中野航太郎さんはどうでしょう？

宮岸 | 中野さんの作品はこのクラゲの作品の方は、日本画の画材で描かれています。なので、岩絵具特有のキラキラした感じだったりとかっていうのが、すごい綺麗な作品です。

中野さん自身は色弱をお持ちの方で、赤と緑が茶色っぽい色に見えるのですが、こちらのぬいぐるみの魚たちの作品、とてもカラフルに書かれているんですけど、これはご自身で、ここにこの色置きたいっていうのを決めて、色等は判別がつかない場合はご家族の方に聞いたりであったりとかっていうふうには赤とか緑も自在に使いながら着彩されています。でもクラゲの作品、すごい青が強いイメージなんですけれど、青は割と私たちと変わらない形で綺麗に見える色だったので。専用のアプリがあるんですよね。色弱の方の見える世界を体験できるっていうスマホ用のアプリがありまして、そのアプリで見た時も、割と見ている世界として近いのかなっていうので、この作品選ばせていただきま

した。この作品、コロナ禍に描かれたもので、なんかこう、捕まっている魚が上の方にいると思うんですけど、これがコロナ禍で身動きが取れない不自由さを表していたりとかしています。私自身、インタビューに何う直前にちょっとコロナになってしまって、その後遺症で味と匂いがしない期間があったんですね。こういう今までわかっていたものがわからなくなったりっていうので、食べ物腐っているかどうかはわからなかったりとか、他の人にとってわかるものがわからなくなるっていう経験を通して、こう、見えている色が他の人には見えるけれど自分には見えていないっていう世界がすごい危険に溢れているっていうのも、身に迫るものとして感じる事ができて。現在の技術では、眼鏡等でいろんな補正をすることはできるそうなんですけれど、中野航太郎さん的には、この自分に見えている色の世界で生きていくっていう覚悟を決めて作家活動をされているので、そういう作家としての力強さみたいなのところも、系統の違う2つの作品で紹介できればと思って選びました。

渋谷 | 頭でわかっているだけじゃなくて、ご自身がコロナになる経験を通して、匂いや味がわかっていたのがわからなくなるっていう経験を通じて、何か中野さんの世界に近づけたような感じがするってことですよね。ありがとうございます。次、趣馬留都さん。

宮岸 | はい、趣馬留都さんも私が担当させていただきました。趣馬留都さんの作品を展示しようって考えた時に、この金魚のお皿たちが食卓の上で泳いでる姿を見てみたいっていうのが自分の中でとても大きくて、普通の美術館で使われるような白くて四角い展示台ではなく、普通の一般家庭でも使われそうな木目が見える円形の優しい形の食卓を選ばせていただいて、箸もこの色がいいかなというので追加で購入して、展示させていただきました。あまり美術館のように形式ばった展示ではなく、日常生活の延長線上というか、生活の中にこういう作品が入ったらどうなるのかな、っていうのを想像しやすいような展示をしたいなと思って、実際に箸置きとして使って、お皿の上に食べ物は盛っていないんですけど、実際に食卓を誰かと囲むことを想像しやすいような展示を目指しました。

渋谷 | ひとつだけ箸の方向が違うんだよね。

宮岸 | それは、左利きの人用にひとつだけは方向が違って、その左利き用をちょっとこう置こうかなと思ったのは、このキュレーションチーム3人いるので、この3人で食卓を囲むんだったらどうなのかなって考えた時に、小林さんが左利きなんですよね。ということで左利きの席一席設けております。

渋谷 | はい。私も右利きなんですけれど右利きの方がや世の中多いから、そっちがマジョリティになっちゃっているけれど、細かい多様性がここにも出ているっていう例ですね。ありがとうございます。

渋谷 | 高木重寿さんは私が担当いたしました。高木さんは高峯さんと並んで、昨年度の今4年生に上がった3年生が手がけてくれて、高木さんの作品は昨年度は多かったんですけども、今回は1部屋に15人の作家さんということで、1人あたりの作品数が減っちゃったんですけど、じゃあそれをどう面白く見せるか、っていうところが僕にとっての課題だったんです。僕も50歳ですけど、80年代からコンピューター・ゲームとかやっていた

た世代です。その時のイメージってヘックスなんですよ。それでこれはタイルなんですよ。家の壁とかに使うね。それを高木さんの方では、これまでも展示で使っていたってことをお聞きして、じゃあどんなタイプがあるんだろうと見て、ホームページで探したらこれが出てきたので、これを使うとコンピューター・ゲームの勝負っぽいな、って思ってた。少年漫画のバトルシーンっていうふうに解説には書いたんですけど、それをあまりきっちりさせすぎずに見せることで、動きがあるというか臨場感がある、というような感じにして。サソリと、玄武って亀の形をした中国の怪物というか生き物をモチーフにした作品は精巧だし造形が素晴らしいので、対決させつつ、それをギャラリーが見ているような演出というか、そういった形で見せたら面白いんじゃないかなということ今回こうやって展示させてもらったという次第です。高木さんも一緒に来て 30 分ぐらいでとてもいい展示に仕上げることができたかなと思っています。

渋谷 | ちょっと時間オーバーしているんですけど、どうでしょうか、宮本さんに最後に聞きたいんですけど。いろんなタイプの作家さんがいて、それこそ、仕事に人その人を合わせるんじゃないくて、その人の得意なことが仕事になるようにする、それを展示する、もしくはグッズとしてプロデュースしていくっていうご経験と引き出しがある中で、今 3 人が、作品を展示という形でプロデュースをしたわけですよ。3 人のお話を聞いて宮本さんがなにか思うところがあれば、ちょっとお話いただければなと思うんですけど。

宮本 | はい、ありがとうございます。なんか、すごい良かったです、皆さんのお話。すごい感動しちゃった。この話を聞いて、もう一度展覧会を見たいなと思いました。そうですね、私たちも彼らのことを、こう、かっこよくじゃないですけど、どういう形で社会に繋げたらいいかっていうのを、常に考えているんですけど、ああ、そういう思いで展示したんだとか、今すごく話を聞いてわかって。私たちも展示するけれども、いろんな展覧会でいろんな企画の中でキュレーターの方がいてお話をお伺いすると、その展覧会のコンセプトにあわせてこういうふうに提示しました、って話を聞くんですけど。すごく 3 人が本当にすごく作家に寄り添って、この人の制作プロセスをどうやって展示で見せられるかっていうところをすごく考えてくださっているの、私たちがやっている日々の実践というか、それとすごく共鳴するというか繋がるものをすごく感じて、この若い学生さんの視点でのこの取り上げ方は、本当にこれからの皆さんにすごく影響があるなって思いました。そんなこと言っちゃうとおかしいかもしれないですけど、美術の方たちにも影響があるんじゃないでしょうかね、とったりして聞いてました。すごい視点だなと思って、素敵でした。

渋谷 | はい。ありがとうございます。今まで展示してきたけれど、美大生だからなのか、それとも単に今まで見てこなかった方が改めて面白いと思ってこう見せたらいいんじゃないの、っていうことで見せ方を考えるというか、何が面白いのかってことを主張していく、っていうことが、やっぱり今回新しい視点とか見せ方とか、「あ、こういう見せ方でもいいんだ」ってお気づきになられたご家族の方とかご支援者の方とか、また作家ご本人の方がいらっしゃるかなと思います。だから、できればこういった機会は、例えば埼玉県がしているように、国民文化祭だからっていうことではなくて継続して「場」と「機会」を設けているような感じでやっていくと、より広がりがあって創造的になるのかなと私も思った次第です。

宮本 | 工房集の作家のキュレーションしてもらいたいぐらいです。

渋谷 | 大変名誉なお言葉ですね。ありがとうございます。はい。時間がちょっと押ししてしまったので、またおしゃべりする機会を最後に設けたいと思うので、一旦このセッションは閉じたいと思います。小林さん、高橋さん、宮岸さん、それから宮本さん、どうもありがとうございました。

〈了〉